企業生成･発展の変動要因としての企業家（Ⅳ）

―― 資本主義経済システムの変動要因としての企業家 ――

川　　上　　義　　明

目　次

はじめに
1．シュンペーターにおける企業家
2．企業家の機能＝新結合の遂行
3．企業家と資本家，経営管理者，発明家
4．イノベーションへのイニシアチブ
むすび

は　じ　め　に

筆者は，前々稿と前稿において産業革命期以前の段階から産業革命期を経て，資本主義経済システムが生成し，確立した頃まで，諸研究者がどのように企業家を取り上げ，その機能をみたか検討した[1]。取り上げ方によっては，必ずしも生産や流通に拘わらず，古くはカンティヨン（Richard　Cantillon）がみたように,不確かな生活をしているのであれば(その意味でリスク・テーカーであれば)，乞食も盗賊も企業家たり得た。資本主義経済システムの生成と確立の１大要因とみられたのが企業家であった。

では，資本主義経済システムが確立した後において，企業家はどのように

1) 川上義明［2007 年 a］，川上義明［2007 年 b］

みられ，どのような機能をもつと考えられたのだろうか。

小稿では，シュンペーターを取り上げ検討してみよう。

1．シュンペーターにおける企業家

(1) シュンペーターのビジョン

この地球は有限である。歴史家にことさら言わせなくとも，経済社会ひいては人間社会が永久にありつづけることはない。資本主義社会が永遠ということも考えられない。この点はシュンペーター（Joseph A. Schumpeter）にしても然りである。

シュンペーターは，初期の論文「租税国家の危機」（1918年）で租税国家（別の表現では資本主義）の将来すなわち資本主義の衰退，機能停止に関心を持ち，社会が私企業と租税国家を越えて進んでいること，「社会主義」[2)]への進行に注目していた[3)]。

このようなビジョンの下でシュンペーターは，その後，生涯をつうじて，資本主義経済がどうなっていくのか一貫して問題意識を持ち続けた。

シュンペーターは資本主義を否定するのではないし，社会主義を擁護するのでもない。それが望ましいことをあるいは逆に望ましくはないことを説いたのでもなかった。社会主義の到来を予言するのでも，予見しようとするのでもなかった。シュンペーター自身，自ら社会主義者ではないと言っている[4)]。

シュンペーターは観察することができる様々な傾向 ── 資本主義それ自体

---

2) シュンペーターは「社会主義とは生産手段に対する支配（control），または生産自体に対する支配が中央当局に委ねられているような制度的パターンである」としている ── Schumpeter [1943], p.167. 邦訳書（中山・東畑訳，〔中巻〕），302 ページ。

3) Schumpeter [1918], SS.59-60. 邦訳書（木村訳），120 ページ。

4) Schumpeter [1943], p.61. 邦訳書（中山・東畑訳〔上巻〕），114 ページ。

5) Schumpeter [1939], Vol.1, p.698. 邦訳書（金融経済研究所訳〔Ⅳ〕），1031 ページ。

が自らを行き詰まらせる基本的傾向[5)] ── をみようとしたのであった。資本主義は，前資本主義社会の骨組みを壊し，自己の進歩を阻止する障害物をも破壊し，さらにその崩壊を防いでいる「控え壁」さえも破壊してしまった[6)]。今度は，その資本主義経済の非常な成功こそが自らを擁護している社会制度をくつがえし，かつ不可避的にその存続を不可能ならしめる。その後継者として社会主義を強く志向するような事態を作り出すとみたのであった[7)]。

シュンペーターは「租税国家の危機」で与えた解答と同じ解答を『資本主義・社会主義・民主主義』(1943年）の中で与えている。「資本主義は生き延びることができるか」と問うが，その解答は「否」である[8)]。資本主義経済は，生き延びることはできない[9)]。このことは，アメリカ経済学会の会長演説のために用意された（最後の論文といってもよく，自らはついに完成できなかった論文)「社会主義への前進」の中でシュンペーター自身が強調している[10)]。

⑵　シュンペーターの理論体系における企業家

さて，シュンペーターにおいて，資本主義経済分析の理論の中心にあったのが企業家(Unternehmer,　entrepreneur)とこの企業家が果す機能であった。シュンペーターは，すでに「経済危機の本質」(1910年）の中で，経済発展の本質は「新結合の遂行」(Durchsetzung　neuer　Kombinationen)にあり，この点にこそ企業家の真の機能があるとした[(補注)]。

（補注）ここに企業家の機能としての「新結合の遂行」が初めてみられるのであ

6) Schumpeter [1943], p.139. 邦訳書（中山・東畑訳〔上巻〕)，252 ページ。
7) Schumpeter [1943], p.61. 邦訳書（中山・東畑訳〔上巻〕)，61 ページ。
8) Schumpeter [1943], p.61. 邦訳書（中山・東畑訳〔上巻〕)，113 ページ。
9) Schumpeter [1943], p.447. 邦訳書（中山・東畑訳〔上巻〕)，61 ページ。
10) Schumpeter [1950], p.447. 邦訳書（中山・東畑訳〔下巻〕)，790 ページ。

る。
　すなわち，「経済発展の本質は，以前には定められた静態的用途に充てられていた生産手段が，この経路から引き抜かれ，新しい目的に役立つように転用されることにある。この過程をわれわれは『新結合の遂行』と呼ぶ。そして，これらの新結合は，静態における慣行の結合のように，いわば自らそれ自身を貫徹するものではない。それらは少数の経済主体のみに備わっている知力と精力を必要とする。こうした新結合を遂行することにこそ企業家の真の機能がある」[11]と。

この考え方が後の『経済発展の理論』（1926年）において展開された。資本や利子，信用，景気循環といった諸現象を企業家による「新結合の遂行」から一貫して説いた。

シュンペーターはこの「新結合の遂行」を『景気循環論』（1936年）では，「イノベーション」（革新）という用語で表現した[12]。

「イノベーション」とは経済的「要素を新しいやり方で結合すること」「新結合を遂行すること」であるとされるが[13]，内容的に両者はそう変わるところはない。

そこでは，企業家は経済変動の１要因としてではなく，変動機構の担当者として捉えられた[14]。つまり，後にみるように企業家を資本主義経済の内側から「経済の軌道を変更する」=「経済を発展させる動力」とみた[15]。ここに，シュンペーターの理論体系における「企業家」の位置付けをみることができ

---

11) Schumpeter [1910], S.284. 邦訳は，根井雅弘［2001 年］の 33～34 ページを参考にした。
12) Schumpeter [1939], Vol.1, p.223. 邦訳書（金融経済研究所〔Ⅱ〕），332 ページ。
13) Schumpeter [1939], Vol.1, p.87. 邦訳書（金融経済研究所〔Ⅰ〕），126 ページ。
14) Schumpeter [1926], S.93. 邦訳書（塩野・中山・東畑訳），143 ページ。
15) なお，シュンペーターが言う経済発展とは，経済がそれ自身の中から生み出す変化のことであり，質的に新しい現象のことである。外部からの衝撃によって動かされた経済の変化ではない ── Schumpeter [1926], S.95. 邦訳書（塩野・中山・東畑訳），146 ページ。その際，イノベーションのもたらす経済過程内の変化をそのあらゆる結果や経済システムのそれへの反応と合わせて経済発展（economic evolution）と呼ぶとしている ── Schumpeter [1939], Vol.1, p.86. 邦訳書（金融経済研究所〔Ⅰ〕），124 ページ。

る。

以下，シュンペーターが企業家をどのようにみているのかについて，その主要な著作のうち，とくには『経済発展の理論』,『景気循環論』そして『資本主義・社会主義・民主主義』(1943年）から検討してみよう。

2．企業家の機能＝新結合の遂行

(1) 企業家の機能

では，このように位置付けられた「企業家」とは何か。

われわれもすでにみていることだが,「シュンペーターはセイ(Jean-Baptiste Say）を再発見した」[16]とドラッカー（Peter F. Drucker）に言わせたように，シュンペーターはかつて，セイが「企業家の機能は生産要素を結合し，総合することである」と言ったことに注目する。このことは，新しいことを遂行する場合であるから，企業家の機能である。もしこのことが，年々「決まったとおりに処理されている」ことであるならば，年々歳々，循環的に行われているのであれば，それは企業家の機能ではない[17]。

このように,『経済発展の理論』の中核に置かれている企業家とは，最も簡単に言えば「イノベーションを遂行する個人」[18]である。企業家とは「経済発展を担う者」である。もう少し言えば,「新結合の遂行」を自らの機能とし，その遂行に当たって能動的要素となるような経済主体である[19]。

セイも企業家を資本主義経済の枠内には留めず，広く捉えていた。シュンペーターも,「企業家機能はそれ自身は資本主義社会に限定されない。企業家機能が意味するような経済的リーダーシップは他の形態の経済にも存在するからである」[20]とする。シュンペーターは企業家はその機能を果している

16) Drucker [1985], p.27. 邦訳書（上田訳)，39 ページ。
17) Schumpeter [1926], S.113. 邦訳書（塩野谷・中山・東畑訳)，166 ページ。
18) Schumpeter [1939], Vol.1, p.102. 邦訳書（金融経済研究所訳〔Ⅰ〕)，149 ページ。
19) Schumpeter [1926], S.111. 邦訳書，164 ページ。

限り，社会主義経済の機関であろうと封建賦役農場の領主であろうと，原始的種族の首長であろうとかまわないとしている[21]。

シュンペーターは，このように，資本主義経済の枠内のみに企業家を認めるのではないのだが，資本主義経済内にあっては，企業家は，株式会社や個人企業における使用人，例えば取締役（Direktor）や役員（Vorstandmitglieder）等であっても差し支えない。加えて，企業設立の場合に，金融業者（Finanzier）や発起人，金融法律顧問，技術者のようにただ新規設立のためにのみ働き，１つの企業との間に持続的な関係がない者であっても差し支えないと考えている[22]。これらの者は企業設立時に臨時的に「企業家」であるというわけである。

⑵　「新結合の遂行」という概念

これとは逆に，シュンペーターが言うには通常，農民，手工業者，自由業者，工場主や産業家，商人といった，自らの経済計算で行動する独立の経済主体のすべてが企業家なのではない[23]。

なぜなら，企業家としての一定の機能を果していないからである。上でみたように，人は企業家としての機能，「新結合の遂行」を果している限りにおいて企業家なのである。

この「新結合の遂行」という概念はすでに「租税国家の危機」において，新たな生産方法や新たな商業的結合，新しい組織形態での「新しいものの遂行」という表現で一部述べられているけれども[24]，例えば次の５つのケースである[25]。

---

20) Schumpeter [1939], Vol.1, p.223. 邦訳書（金融経済研究所訳〔Ⅱ〕），332 ページ。
21) Schumpeter [1926], S.111. 邦訳書（塩野・中山・東畑訳），164 ページ。
22) Schumpeter [1926], S.111. 邦訳書（塩野・中山・東畑訳），164 ページ。
23) Schumpeter [1926], S.112. 邦訳書（塩野・中山・東畑訳），165 ページ。
24) Schumpeter [1918], S.29. 邦訳書（木村訳），75 ページ。

①新しい財貨の生産。すなわち消費者の間でまだ知られていない財貨あるいは新しい品質の財貨の生産。

②新しい生産方法の導入。すなわち当該産業部門において実際上未知な生産方法の導入。これは決して科学的に新しい発見に基づく必要はなく，また商品の商業的取り扱いに関する新しい方法を含んでいる。

③新しい販売市場の開拓。すなわち当該国の当該産業部門が従来参入していなかった市場の開拓。

④原料ないしは半製品に関する新しい供給源の開拓。この場合においても，この供給源が既存のものであるか ── 単に見逃されていたのか，その獲得が不可能とみなされていたのかを問わず ── あるいは初めて作り出されなければならないかを問わない。

⑤新しい組織の実現。すなわち独占的地位（例えばトラスト化による）の形成あるいは打破。

ここに，シュンペーターにおいては，生産サイド・供給サイドからの問題設定がなされ，消費者の嗜好といった消費サイド・需要サイドが積極的な経済変動の要因とはされていないことが示唆されているといってよいであろう[26)]。

---

25) Schumpeter [1926], SS.100-101. 邦訳書（塩野・中山・東畑訳），152 ページ。なお，シュンペーターは『景気循環論』において，ガム，レーヨンの靴下，ラジオ，電灯，自動車，飛行機，武器，新市場の開発，鉄道輸送，新組織形態（企業合同など）をイノベーションの例として挙げている。

26) シュンペーターが例示しているのは，新生産方法（機械化された工場，電化された工場，化学的合成等），新商品（鉄道サービス，自動車，電気器具），新組織形態（企業合併），新供給源（ラプラタ羊毛，アメリカ綿花，カタンガ銅），新取引ルートや新販売市場である ── Schumpeter [1943], p.68. 邦訳書（中山・東畑訳〔上巻〕），125 ページ。さらには，新生産工程の導入（アルミニウム産業），産業再編成（旧スタンダード石油）も挙げている ── Schumpeter [1943], p.89. 邦訳書（中山・東畑訳〔上巻〕），159 ページ。

ところで，経済の発展のためには，この例示された「新結合の概念」の５つのケースのどれに当たるにせよ，企業家がそれを果すには格段のエネルギーと才智を必要とするであろう。

最も基本的なことであるが，では企業家に「新結合の遂行」を余儀なくさせる力は何か，企業家をイノベーションへと駆り立てる内的要因（動機）は何か。どのようなインセンティブに基づいて企業家は「新結合の遂行」を推し進めるのだろうか。そこのところをシュンペーターは，経済外的要因[27]やその他，幅広い歴史的・社会科学的研究に委譲しているようにみえるというコメントをみることもできるが[28]，シュンペーター自身は次の３点をその要因としている[29]。

①私的王朝・自己の王朝を築き上げようとする意思あるいは夢。

②勝利者意思の充足（闘争意欲・成功獲得意欲の満足）。

③仕事そのものに対する喜び，新規創造の喜び。

小稿では，この部分が決定的に重要だとは考えるが，これ以上は立ち入らない。一応，「企業家は新結合を遂行する」ということを「命題」とすることにしよう。

３．企業家と資本家，経営管理者，発明家

シュンペーターは従来「あやふや」であったともいってよい，企業家と資本家，企業家と経営管理者，発明家（発明）と企業家（イノベーション）についてその区別を明瞭にした上で，関連を論じている。

---

27) 政治上の出来事，天変地異，戦争や革命，人口の変化等。なお，「経済内的要因」とは，消費における嗜好の変化，生産要素の変化，商品供給方法の変化等である。

28) Schumpeter [1926], 邦訳書（塩野・中山・東畑訳），「解説」（中山伊知郎），531ページ。

29) Schumpeter [1926], SS.138-139. 邦訳書（塩野・中山・東畑訳），197～198ページ。

(1)　企業家と資本家の差異

資本家とは貨幣の所有者であるか，貨幣請求権の所有者であるか，その他何らかの財の所有者である[30]。この所有者が信用を供与する場合「資本家」となる[31]。

これとは逆に，新結合を遂行しようとするものすなわち企業家は，貨幣あるいは貨幣代替物についての信用を資本家に求め，これによって必要な生産手段を購入する。

資本家や株主は，企業家に貸付けをし，あるいは出資をするなり，事業を営むなりして，失敗の際，危険（リスク）をとるであろう。「新結合の遂行」はいずれも実際には失敗する危険にさらされている[32]。したがって，企業家も失敗の際には何らかの危険（リスク）を負担する。

このように，危険（リスク）の負担者である点では資本家と企業家は同様である。だが，その機能からみると資本家＝企業家ではない。

ところで，資本家の中に「新結合の遂行」を行う者がいれば，その者は当然企業家である。また，蓄財をし，あるいは相続し，企業家が他の企業家に信用を供与することがあればその企業家は当然資本家である。

こうして，資本家と企業家は概念としては別なのだが，資本家でもあり，企業家でもある者は存在し得るのである。実際，シュンペーターは，競争的資本主義経済の時代には，企業家は企業の創設者，企業の所有者の中に見出されたとしている[33]。

(2)　企業家と経営管理者の差異

では，いったんある者が企業家になれば，その者はずっと企業家たり得る

30) Schumpeter [1926], S.111. 邦訳書（塩野・中山・東畑訳），165 ページ。
31) Schumpeter [1926], SS.104-105. 邦訳書（塩野・中山・東畑訳），156 ページ。
32) Schumpeter [1926], SS.330-331. 邦訳書（塩野・中山・東畑訳），433 ページ。
33) Schumpeter [1939], Vol.1, p.103. 邦訳書（金融経済研究所訳〔Ⅰ〕），150 ページ。

のであろうか。

ある者の中には生まれつき企業家の「資質」[34]を備えた者もあるであろう。しかし，大多数はそうではない。シュンペーターがみるところ，「新結合の遂行」は簡単ではない。一定の（資質や）能力を持った人々にのみ可能である[35]。誰でも「新結合を遂行する」場合にのみ基本的に企業家である。したがって，その者が一度創造された企業を単に循環的に経営していくようになると，企業家としての性格を喪失する。誰でも数十年間の努力を通じてつねに企業家のままでいることは稀である[36]。

ある者が，「誰かにあるいは何かにインセンティブを与えられて」，企業家として「新結合の遂行」という機能を果すかもしれない。その者は失敗によって，企業家を離れることもあるだろう。これとは逆に，企業家に戻ることもあり得る。循環（均衡）状態の経済においては，企業家は利潤も得なければ損失も蒙らない。企業家はそこでは何ら特殊な企業家としての機能を果していない。つまり，彼はそこでは企業家としては存在しない。彼は単なる経営管理者なのである。

このように，シュンペーターはこの者を経営管理者（Betriebsleiter）と呼び企業家という言葉を使わないのである[37]。

尤も，思うに企業家がイノベーションを行いながらもその一方で企業の単なる経営管理者の場合もあるであろう。

⑶　企業家と発明家の差異

シュンペーターは，「発明」については，それはそのままでは経済発展の外的要因とはならないとする。それが事業上実行に移されるやいなや経済発

34) 創意，権威，先見の明などである。
35) Schumpeter [1926], S.339. 邦訳書（塩野・中山・東畑訳），443 ページ。
36) Schumpeter [1926], S.116. 邦訳書（塩野・中山・東畑訳），170 ページ。
37) Schumpeter [1926], S.113. 邦訳書（塩野・中山・東畑訳），146 ページ。

展の内的要因となる[38]。発明が外生的に生じると，企業家がそれに着目し，イノベーションたり得る可能性を見抜き，遂行していくのである。

発明は必ずしもイノベーションをもたらさない。発明は経済的に関係ある結果を独力ではまったく生み出さない。発明からイノベーションを定義することはできない。発明をすることと，それに対応するイノベーションを遂行することとは経済学的には別々のことなのである[39]。

シュンペーターはむろん「発明をする者」＝発明家と「発明をイノベーションに変える者」･「イノベーションを遂行する者」＝企業家が同一人格のこともあるとする[40]。「発明＝イノベーション」の場合ももちろんあるであろう。ライト兄弟（Wilbur Wright, Orville Wriht）による飛行機の発明の例がある。

4．イノベーションへのイニシアチブ

(1) 経済変動と企業家

シュンペーターは資本主義経済過程を，①企業家のリーダーシップの経済システムに与えるインパクトと②今度は経済システムのそれへの反応ないしは適応の過程すなわち経済発展の過程として説く。

シュンペーターは景気循環現象の動因として，技術的進歩を重要視する。「新結合の遂行」は容易（たやす）くはない。議論の出発点を循環（均衡）状態におけば，そこでは一定の能力を持つものだけが企業家になる可能性がある。単独で改新（Neuerung）がみられる[41]。

ところが，イノベーションはいつまでも孤立的な出来事なのではない。上

38) Schumpeter [1939], Vol.1, p.8. 邦訳書（金融経済研究所訳〔Ⅰ〕），10 ページ。
39) Schumpeter [1939], Vol.1, pp.84–85. 邦訳書（金融経済研究所訳〔Ⅰ〕），121～122 ページ。
40) Schumpeter [1939], Vol.1, pp.84-85. 邦訳書（金融経済研究所訳〔Ⅰ〕），121～122 ページ。
41) Schumpeter [1926], S.340. 邦訳書（塩野・中山・東畑訳），444 ページ。

首尾のイノベーションにならってまず若干の企業が，次いでたいていの企業があとに続くというように群生し，一段となって出現する傾向がある[42]。「新結合の遂行」が群生的に出現する（Schwarmweise Auftreten）。これが好況期の基本的特徴である[43]。

好況期には，投資の増加（好況開始の最初の兆候），購買力の創造，生産手段産業の活気，価格上昇，失業の減少，賃金の上昇，利子率の上昇，貨物輸送の増加，銀行信用の逼迫がみられるようになる[44]。

だが，経済には循環がみられる。経済は好況期からやがては不況期に入っていく。

シュンペーターがいうには，不況期は，企業家およびあらゆるその追随者，とりわけ好況の価格騰貴による偶然的あるいは投機的受益者から利潤可能性を奪う。企業家はもはや「うまくいかない」ようになり，それ以上の利潤を上げず，かえって損失に脅かされるようになる。原則的な場合，企業家の企業家利潤（Unternehmereinkommen）は枯渇し，彼の他の企業家所得は最小限度になるであろう[45]。

好景気は，イノベーションがすべて慣行の軌道に吸収されることによって終る。これが不況期である。不況が異常な過程を経ると，パニック，破産，信用体系の破綻といった異常な事態すなわち恐慌がもたらされる[46]。

シュンペーターの場合，上でもみたけれども，経済における「イノベーション」のイニシアチブは，生産の側にある。景気変動（＝資本主義経済の発展）は，このように企業家による「新結合の遂行」，イノベーションから説かれるのである。

---

42) Schumpeter [1939], Vol.1, p.100. 邦訳書（金融経済研究所訳〔Ⅰ〕），146 ページ。
43) Schumpeter [1926], S.339. 邦訳書（塩野・中山・東畑訳），443 ページ。
44) Schumpeter [1926], SS.341-342. 邦訳書（塩野・中山・東畑訳），445～446 ページ。
45) Schumpeter [1926], S.360. 邦訳書（塩野・中山・東畑訳），466 ページ。
46) Schumpeter [1926], S.365. 邦訳書（塩野・中山・東畑訳），472～476 ページ。

(2)　創造的破壊の烈風

シュンペーターにおいては，すぐ上でみたように，資本主義経済は発展過程であり，その動因が企業家の「新結合の遂行」＝イノベーションであった。

シュンペーターは，『資本主義・社会主義・民主主義』において，それまでの研究をいっそう展開する。資本主義は生き延び得るか，社会主義は機能し得るか，民主主義の将来はどうなるのかを問うている。

従来の立論のとおり，シュンペーターは資本主義経済は本来，静態的ではないのみならず，また静態的たり得ないとする。資本主義経済はその内部から古きものの破壊と新しいものの創造をもたらす。資本主義経済のエンジンを起動せしめ，その運動を継続せしめる基本的衝動は，先にもみたように，資本主義的企業の創造にかかる新消費財や新生産方法ないしは新輸送方法，新市場，新産業組織形態からもたらされる。不断に古いものを破壊して新しいものを創造して，絶えずその内部から経済構造に大変革をもたらす（revolutionize）産業上の（生物学でいうところの）突然変異（industrial mutation）がその中でみられる。これが，すなわち「創造的破壊」（Creative Destruction）である。この過程こそ資本主義経済の本質的な事実である。これこそが，まさに資本主義経済を形づくるものであり，すべての資本主義企業はこの中で生きていかねばならない[47)]。

しかも，この「創造的破壊」は絶えず烈風のごとく吹き荒れる。絶えざる「創造的破壊の烈風」である[48)]。

このように，シュンペーターは新しく「創造的破壊」および「創造的破壊の烈風」を説くのである。

---

47) Schumpeter [1943], p.83. 邦訳書（中山・東畑訳〔上巻〕），150～151 ページ。

48) Schumpeter [1943], p.84, p.88. 邦訳書（中山・東畑訳〔上巻〕），152 ページ，156 ページ。

む　す　び

シュンペーターが生きたのは，第二次世界大戦を挟んだ20世紀における大企業の台頭と成長の時期であった。シュンペーターは，上の「創造的破壊」を主として推し進めるのは企業であるとみた。シュンペーターは，「完全競争はただ不可能であるばかりでなく，劣等である（inferior）」[49]とする。

その一方で，製造業においては，1890年代以降，大規模企業が優勢になり始め，「大企業の時代」になっているとみた[50]。つまり，企業家が大企業において，イノベーションをなしている様をみたのである。

シュンペーターは，大企業が「経済進歩，とりわけ総生産量の長期的増大の最も強力なエンジンとなってきた」[51]としている。そして，大企業のうちでも巨大企業とは絶えず入れ替わるものがイノベーションからイノベーションへと移っていく外殻にすぎないとみるのである。だが，それだけではない。さらには，イノベーションは新人（New Man）のリーダーシップの台頭に結びついており，イノベーションはいまなお若い企業（＝中小企業）の中で主として出現している[52]。かつての競争的資本主義の時代には企業の創設者，所有者に企業家がみられたようにである。

競争的資本主義経済段階におけるように，企業家が出資者・所有者，所有経営者である場合には，比較的分かりやすいのだが，こうした大企業それも巨大企業の場合もシュンペーターの規定によれば「新結合の遂行」・「イノベーション」を担うものが企業家である。ではいったいそれらの人々は具体的には誰を指すのだろうか[53]。

---

49) Schumpeter [1943], p.106. 邦訳書（中山・東畑訳〔上巻〕），193 ページ。
50) Schumpeter [1943], p.81. 邦訳書（中山・東畑訳〔上巻〕），148 ページ。
51) Schumpeter [1943], p.106. 邦訳書（中山・東畑訳〔上巻〕），192 ページ。
52) Schumpeter [1939], Vol.1, pp.96-97. 邦訳書（金融経済研究所〔Ⅰ〕），139～140 ページ。

大企業の場合やあるいは中小企業の場合において，そもそも今日の「新結合の遂行」･「イノベーション」にはどのような内容を与えればよいのであろうか。

企業家の機能としてだけではなく，企業家の手から離れたものとしてイノベーションをみるのがドラッカー（Peter F. Drucker）である。ドラッカーはまたイノベーションを企業内に留めない。積極的に企業はもちろんその他広く組織体におけるイノベーションを説いた。

ここに，イノベーションの「自立化」が見られるように思われる。次号において，その間の事情を検討してみよう。

引用・参考文献

1．和文

〔1〕池本正純［1984 年］,『企業家とはなにか』，有斐閣。

〔2〕金指　基［1996 年］,『シュンペーター再考 ── 経済システムと民主主義の新しい展開に向けて ── 』，現代書館。

〔3〕川上義明［2005 年］,「中小企業への新しい視点を求めて（その 2）── 海外における準中小企業論的フェーズにおける諸研究 ── 」,『福岡大学商学論叢』，第 50 巻第 1 号。

〔4〕川上義明［2007 年 a］,「企業生成・発展の変動要因としての企業家（Ⅱ）── 産業革命期とそれ以前の段階の考察 ── 」,『福岡大学商学論叢』，第 52 巻第 1 号。

〔5〕川上義明［2007 年 b］,「企業生成・発展の変動要因としての企業家（Ⅲ）── 産業革命期以後の段階の考察 ── 」,『福岡大学商学論叢』，第 52 巻第 2 号。

〔6〕根井雅弘［2001 年］,『シュンペーター ── 企業者精神・新結合・創造的破壊とは何か ── 』，講談社。

2．欧文

〔1〕Drucker, Peter. F. [1985], *Innovation and Entrepreneurship : Practice and Principles,* Harper & Row Publishers. 上田惇生訳（新訳)『イノベーションと起業家精神 ── そ

53) 池本正純教授は,「社会主義」とは呼ばないとしても，資本主義の「変形」に対する隠れたシュンペータリアンとでもいうべきガルブレイスが与えた解答が「計画化体制」「新しい産業国家」であるとする（Galbraith, John K. [1978]）。というのも，そこで，経済をオペレートするのがテクノストラクチャーであり，ガルブレイスが企業家機能の無用化の傾向を暗黙のうちに認めているからである（川上義明［2005 年］も参照)。

の原理と方法 ── 』（上）（下），ダイヤモンド社，1997 年。
〔２〕Galbraith, John K. [1978], *The New Industrial State,* Houghton Mifflin Co.3rd ed., (1st ed. 1967). 石川通達・鈴木哲太郎・宮崎 勇訳『新しい産業国家』（第 3 版），TBS ブリタニカ，1980 年。
〔３〕Schumpeter, Joseph A. [1910], Uber das Wesen der Wirtschaftskrisen, *Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung,* Bd.19, 1910.
〔４〕Schumpeter, Joseph A. [1918], Die Krise des Steuerstaats, *Zeitfragen aus dem Gebiete der Soziologie,* Reihe 1, Heft 4, Graz und Leipzig. 木村元一訳『租税国家の危機』，勁草書房 1951 年。
〔５〕Schumpeter, Joseph A. [1926], *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung : Eine Untersuchung über Unternehmergewinn, Kapital, Kredit, Zins und den Konjunkturzyklus* (2. Aufl.), Duncker & Humblot. 塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳『経済発展の理論 ── 企業者利潤・資本・信用・利子および景気の回転に関する一研究 ── 』，岩波書店，1980 年。
〔６〕Schumpeter, Joseph A. [1939], *Business Cycles : A Theoretical, Historical, and Statistical Analysis of the Capitalist Process,* Vol.1, Vol.2, McGraw-Hill Book Co. 吉田昇三監修・金融経済研究所訳『景気循環論 ── 資本主義過程の理論的・歴史的・統計的分析 ── 』，（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）・（Ⅳ）・（Ⅴ），有斐閣，1958 年，1959 年，1960 年，1962 年，1964 年。
〔７〕Schumpeter, Joseph A. [1943], *Capitalism, Socialism and Democracy,* Routledge, (reprint, 1992). 中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義』（上巻），（中巻），（下巻），東洋経済新報社，1962 年。
〔８〕Schumpeter, Joseph A. [1950], The March into Socialism, *The American Economic Review,* Vol. XL, No.2, May. 中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義』（下巻），東洋経済新報社，1962 年，付録所収。
〔９〕Schumpeter, Joseph A. [1951], *Imperialism and Social Classes*, Augusts M. Kelly. 都留重人訳『帝国主義と社会階級』，岩波書店。
〔10〕The Research Center in Entrepreneurial History, Harvard University [1949], *Change and the Entrepreneur : Postulates and Patterns for Entrepreneurial History*, Harvard University Press.